

メディアと子どもの 外国イメージ

小中高校生を対象とした発達的研究

相良順子・萩原 滋



▶ 問 題

現代は国際化の時代といわれ、われわれの日常生活の多くの部分に外国からの情報が入り込んでおり、それなしでは生活が成り立たないまでになっている。さらにわれわれの身近で生活する多くの外国人と直接接触する機会も増えてきている。このような現代社会において子どもは外国というものに対してどのようなイメージをもち、発達とともにどう変化するのだろうか。

子どもの外国人イメージについて調べたものとして、小学校の高学年を対象にした深谷（1992）の調査が挙げられる。深谷によると、全体の7割近くの子どもの「外国といわれて思い出す国」としてアメリカを挙げている。また、「いつてみたい国」では、オーストラリア、フランス、スイス、イギリスという順序で挙げられており、欧米のイメージが強いことが報告されている。

小学生は、学校教育の中では、世界の国々について詳しくは学ばない。平成10年度の社会科の学習指導要領（文部省）によれば、中学生ではじめて外国の地理上の位置、及び歴史を学び、外国に関する体系的な知識を得ることになっている。したがって、小学生の持つ外国のイメージは、メディアや大人からの伝達された知識に基づくものである場合が多いであろう。

日本では、メディアが伝達する外国の情報はアメリカやヨーロッパに偏っているという指摘が常にされてきた。実際、松田（1998）の調査によると、1997年のある1日のNHKのニュースにおける国際情報の中で、報道された時間が一番長かった国はアメリカで、全体の3分の2以上であった。このようにマスメディアはわれわれに欧米、特に米国中心のニュースを伝達しており、情報量および情報の質も欧米とそれ以外の国々ではずいぶん異なっている。

しかし、その傾向は最近になって次第に変化をみせてきている。1999年から2002年にかけて放送された「ここがヘンだよ、日本人」というバラエティー番組には、通常テレビで取り上げられることの少ないアフリカの国々の人々が出演した。その結果、アフリカ人の顕現性が大きかったこと（萩原，2003）、さらにそのアフリカ人の言動が番組視聴者のアフリカのイメージに影響していたことが示唆されている（大坪ら，2003）。また、2002年にワールドカップが日本と韓国で開催され、その期間は韓国はもちろんのこと、

サッカーが盛んなアフリカや中南米の国がメディアで頻繁に紹介された。加えて2001年のアフガニスタン紛争，2003年のアメリカ軍によるイラク攻撃，および拉致問題を始めとする北朝鮮に関する多くの報道というように，欧米以外の外国に関する報道が多くなっている。これらのことから，子どもの外国に関する知識およびイメージは多様になってきていると考えられる。

さらに，この外国に関する情報の変化が子どもに与える影響は，子どもの発達段階によっても異なることが予想される。たとえば，外国に関する知識の量の違いにより，同じ外国のニュースであっても，小学生の受け取り方と中学生，高校生の受け取り方は異なるのではないかと考えられる。中学生以上になると，外国の知識も増え，各国のイメージもより具体的に正確になることが予想される。しかしこれまで，児童から青年までを対象として外国イメージの変化を調査した研究はなかった。本研究では，小学生に加えて，中学生，高校生も対象とした調査を行い，外国のイメージが発達的にどう変化するのかを調べ，それに関連する外国の知識や経験，メディアなどの影響を考察する。

▶ 方 法

本研究では，質問紙調査と個人面接とを実施した。両調査とも，東京近郊の小学生，中学生，高校生を対象に2003年7月に実施した。質問紙調査は各学校の担任に依頼して一斉に実施してもらった。個人面接は，第一著者と大学院生とで行った。

<集団一斉調査>

1. 調査対象者

小学5・6年生（男子28名・女子55名），中学2年生（女子77名），高校2年生（女子80名）

2. 分析に用いた調査項目

1) 属性

所属学校名，学年，性別について尋ねた。

2) 「外国人」とは誰か

「外国人」というとどこの国の人が思い浮かぶか，国名を2つ書くように求めた。

3) 渡航経験

渡航経験の有無と渡航先を尋ねた。

4) 国名の知識

アジア，ヨーロッパ，アフリカという地域で思いつく国を順に3つ挙げるように求めた。

5) 有名人の知識

アメリカ，アジア，ヨーロッパ，アフリカの各国・地域出身の有名人の名前を3つ挙げるよう求めた。

6) 国のイメージ

20の国について，12の形容詞の中から当てはまる形容詞にいくつでもをつけるよう求めた。国の名前は，予備調査から小学生でもある程度知られている国を選んだ。また，形容詞には，小学生でも国のイメージとして持ちやすく，かつ理解可能な形容詞を選んだ。

7) テレビ視聴

PTAの調査⁽¹⁾で小・中学生に視聴頻度の高かった番組をもとに番組のリスト⁽²⁾をつ

くり，その中からよく見る番組を挙げてもらった。高校生⁽³⁾に関しては，外国や外国人の情報が多く含まれる番組を挙げ，その中で選択してもらった。

8) メディア利用

すべての学年に対しテレビ視聴時間を尋ねた。高校生には，新聞，インターネット，映画利用時間も尋ねた。

9) 外国の政治・文化に対する関心

高校生対象に外国の政治，社会情勢のニュース，文化に対する関心を尋ねた。

< 個人面接 >

1. 面接対象者⁽⁴⁾

小学5・6年生(男子20名，女子48名)，中学2年生(女子18名)，高校2年生(女子23名)

2. 方 法

個別に面接を行う。20の国の名前が書かれたカードを対象者に自由に分類してもらう。面接者は，「ここに国の名前が書いてあるカードが20枚あります。好きなように分類してみてください」と教示する。その後，面接者が分類結果を記録する。時間，分類方法に制限は設けない。分類が終わったら，面接者は対象者に対し，グループにまとめた理由を各グループについて聞いていく。

▶ 結 果

本研究では，外国の知識として正しく想起された外国名及び有名人の名前，イメージの発達の变化としては質問紙調査での形容詞選択と個人面接での分類結果を基に分析した。

1. 子どもにとって「外国人」とは

全学年を通じて，全体の8割が「アメリカ人」を挙げており，子どもにとっての外国人は「アメリカ人」ということになる。学年ごとの割合は小学生82.5%，中学生80.0%，高校生78.8%であり，この回答の仕方には学年差はみられなかった。第2の回答としては，小学生と高校生はフランスとイギリスがそれぞれ2割程度で拮抗しており，中学生はイギリスが3割で最も多かった。外国人イコールアメリカ人という子どもの認識の仕方は依然として根強いことが示された。ライフデザイン研究所(1999)の成人対象の研究では，「外国人」でイメージする地域は，北米が90.7%，2位が西欧で71.4%である。年齢に関係なく，日本人にとって外国人とは，アメリカ，ヨーロッパ人に代表される白人であることがわかる。

脚 注

1. 社団法人日本PTA全国協議会「家庭教育におけるテレビメディア」平成13年度調査報告書
2. 小中学生では，学校へいこう! ワンピース USOジャパン 犬夜叉 世界まる見え! テレビ特捜部 うたばん 名探偵 コナン ミュージックステーション どうぶつ奇想天外 伊東家の食卓 あいのり スマップ・スマップ 世界ふしぎ発見 ニュースをリストした。

3. 高校生では，地球に乾杯 世界まる見え! テレビ特捜部 ザ・世界仰天ニュース さんまのスーパーからくりTV 世界ウルルン滞在記 世界ふしぎ発見 世界遺産 素敵な宇宙船地球号 ここがヘンだよ日本人をリストに挙げた。

4. 面接対象者のうち小学生は質問紙調査の対象者でもあるが，中学生と高校生は質問紙調査の対象者と重なっていない。

図1 国名の想起数の年齢による変化

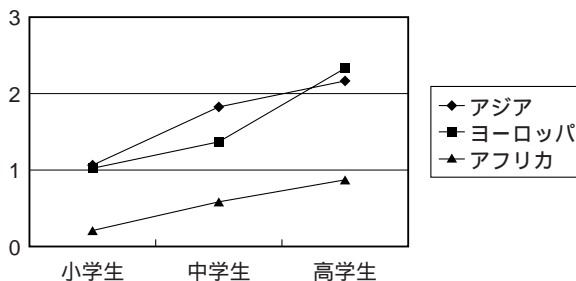
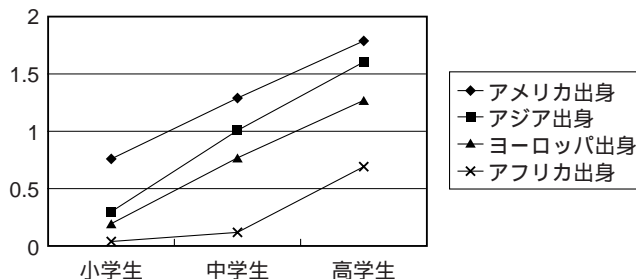


図2 有名人の想起数の年齢による変化



2. 外国の知識の変化

(1) 国名の自由想起

思いつく国としては、アジアでは中国と韓国，ヨーロッパでは、イギリスとフランスの2カ国がどの学年でも多く挙げられていた。アフリカで思いつく国をあげたものは小学生ではほとんどみられず，中学生でケニア，高校生でエジプトが多かった。各地域の国名の正答数（最大値3）を学年別⁶⁾に求め，正答数の平均値を図1に示した。

各地域ごとに一元配置の分散分析を行った結果，正答数の平均値は学年による有意な差異がアジア ($F = 17.7 (236), p < .001$)，ヨーロッパ ($F = 24.8 (235), p < .001$)，アフリカ ($F = 11.8 (233), p < .001$) のそれぞれの地域で認められた。各地域ごとの正答数の平均値はどの地域も学年が上がるにつれ，正答数は増加しており，特にヨーロッパの正答数は中学から高校にかけて著しく増加することが示された。しかし，アフリカについては，学年が上がるにつれ回答数は増加しているものの，高校生でも平均想起数は.86で平均が1を下回っており，回答数そのものがアジア，ヨーロッパに比べて非常に低いことがわかる。

(2) 有名人の自由想起

各地域ごとの思いつく有名人3人まで挙げるように求め，その正答数を学年別に示したものが図2である。各地域ごとに一元配置の分散分析を行った結果，正答数（最大値3）の平均値は学年による有意な差異がアメリカ出身 ($F = 15.6 (236), p < .001$)，アジア出身 ($F = 30.0 (236), p < .001$)，ヨーロッパ出身 ($F = 23.9 (234), p < .001$)，アフリカ出身 ($F = 27.6 (234), p < .001$) のそれぞれの地域で認められた。知っている有名人の

編注

5. 小学生において国名の正答数に関して性別による差異は認められなかった。

表1 想起された有名人の活動領域と数

アメリカ出身の有名人						
活動領域	小学生		中学生		高校生	
	N	(%)	N	(%)	N	(%)
1 日本在住タレント	7	11.1	19	19.6	21	14.8
2 芸能人	25	39.7	52	53.6	107	75.4
3 政治家	14	22.2	4	4.1	5	3.5
4 文化人・歴史人物	5	7.9	0	0	0	0
5 サッカー選手	0	0	0	0	0	0
6 その他のスポーツ	12	19	22	22.7	9	6.3
想起数の合計	63	100	97	100	142	100
アジア出身の有名人						
活動領域	小学生		中学生		高校生	
	N	(%)	N	(%)	N	(%)
1 日本在住タレント	3	12.5	0	0	8	6.3
2 芸能人	6	25	69	86.2	110	85.9
3 政治家	8	33.3	4	5	6	4.7
4 文化人・歴史人物	1	4.2	3	3.8	0	0
5 サッカー選手	6	25	0	0	3	2.3
6 その他のスポーツ	0	0	0	0	1	0.8
想起数の合計	24	100	80	100	128	100
ヨーロッパ出身の有名人						
活動領域	小学生		中学生		高校生	
	N	(%)	N	(%)	N	(%)
1 日本在住タレント	0	0	1	1.7	0	0
2 芸能人	3	18.8	28	48.3	44	43.6
3 政治家	4	25	0	0	0	0
4 文化人・歴史人物	2	12.5	5	8.6	6	5.9
5 サッカー選手	7	43.8	24	41.4	49	48.5
6 その他のスポーツ	0	0	0	0	2	2
想起数の合計	16	100	58	100	101	100
アフリカ出身の有名人						
活動領域	小学生		中学生		高校生	
	N	(%)	N	(%)	N	(%)
1 日本在住タレント	0	0	7	87.5	47	85.4
2 芸能人	1	33.3	0	0	2	3.6
3 政治家	1	33.3	0	0	1	1.8
4 文化人・歴史人物	0	0	1	12.5	1	1.8
5 サッカー選手	1	33.3	0	0	3	5.5
6 その他のスポーツ	0	0	0	0	1	1.8
想起数の合計	3	100	8	100	55	100



数は学年が上がるについてほぼ直線的に増加しているが、アフリカだけは他の地域とくらべて想起数が少ないことがわかる。なお、アメリカ出身の有名人の想起数において小学生で性別による差異がみられ、女子より男子が想起数は多かった ($t = 2.00 (81)$, $p < .05$)。

次に、どういう有名人が挙げられているかを見るために、活動領域別に分類してみたものが表1である。

これをみると、まず、学年による想起の違いがあり、小学生と中学生及び高校生との間に想起される有名人の活動領域が異なっていることがわかった。小学生では全体の想

起数は少ないながらも「ブッシュ大統領」や「金日成」といった政治家の名前がいくらか想起されているが、中学生、高校生は「ボア」や「セイン・カミュ」、「ベッカム」のような現在人気の高い芸能人やサッカー選手⁶が想起されていた。中高生が政治家の名前を知らないわけではないだろうが、本調査の中学高校生にとっては「有名人」というとテレビに頻繁に出演する芸能人がまず思い浮かべられたということだろう。地域別にみると、アメリカとアジアは芸能人中心、ヨーロッパは芸能人とサッカー関係者、アフリカは日本在住タレント中心に認識されている。アフリカの場合、有名人として正確な名前を一人も挙げるができなかった者が小学生98% (81人)、中学生91% (80人)、高校生で59% (47人)と他の地域に比べ極端に多い。このことからアフリカについて調査対象者、特に小・中学生の持っている知識は非常に少ないということがわかる。

有名人の名前として全学年で最も多く想起されたのは、アメリカ人ではボブ・サップ (スポーツ選手) 37人、アジア人ではボア (芸能人) 58人、ヨーロッパ人はベッカム (サッカー選手) 58人、アフリカ出身では日本在住タレントのオスマン・サンコン25人とゾマホン23人であった。

(3) 知識と関連する要因

国名と有名人の名前の想起の数の多さはどのような要因と関連しているかをみるために、視聴するテレビ番組と新聞・ニュース 渡航経験との関連を検討した。

テレビ視聴時間および視聴する番組

テレビ視聴時間

テレビ視聴時間と国名および有名人の想起数との相関関係を調べた結果、高校生において、テレビ視聴時間が長くなるほどアジアとヨーロッパの国の想起数が減り (それぞれ $r = -.228$, $r = -.250$)、有名人の想起数との関係では、中学生において、テレビ視聴が多いほどアジア出身とヨーロッパ出身の有名人の想起数が増加する (それぞれ $r = .226$, $r = .270$) ことがわかった。本研究の中学生では、視聴するテレビ番組のうち、「ミュージックステーション」などの歌番組が上位を占める。これらの番組では海外の歌手が紹介される場合も多く、このような歌番組の視聴から有名人を知る機会を得ているのだろう。これらの結果は、アジアとヨーロッパに関する情報は部分的にテレビから得られること、また、その情報は国名の知識量には結びつかず、有名人の名前の認知度と関係があることが示されたといえる。

テレビ番組

まず、小中学生の視聴するテレビ番組と外国名、有名人の想起数との関連を見てみた。

「ニュース」をよくみると反応した群としなかった群とで国名の想起数に差異がみられるかどうかを検討したところ、小学生において有意な差がみられ、ニュースをよくみると反応した群のほうが、アジア ($t(69) = 3.89$, $p < .001$)、ヨーロッパ ($t(72) = 2.82$, $p < .01$) の国の想起数が多かった。中学生では、ニュース視聴による差異はみられなかった。

次に、番組リストの中で世界の情報が比較的多いと考えられる「世界ふしぎ発見」と「世界まる見え！テレビ特捜部」の番組との関連をみたところ、中学生で「世界ふしぎ発見」をよく見ると反応した群のほうがそうでない群よりアジアの国の想起数 ($t(76) = 1.99$, $p < .05$) と、ヨーロッパの有名人の想起数 ($t(76) = 3.22$, $p < .01$) が有意に多かった。小学生にはテレビ番組による差異はみられなかった。

6. デヴィット・ベッカムはサッカー選手であるが、その外見の良さから女性ファンが多く、日本のメディアではほぼ芸能人同様の扱いをされている。

の扱いをされている。

表2 番組視聴頻度と国名・有名人の想起数との相関（高校生）

番組名	アジア	ヨーロッパ	アフリカ	アメリカ 出身	アジア 出身	ヨーロッパ 出身	アフリカ 出身
世界に乾杯							
世界まるみえ							
ザ・仰天					.269*	.237*	.293**
さんまのからくり				.272*	.239*		
ウルルン滞在記	.264*	.276*	.200+				
ふしぎ発見			.276*		.394***	.294**	.249*
世界遺産							.288*
宇宙船地球号						.280*	.257*
ここがヘンだよ				.310**			

+p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001



高校生の場合は、番組の視聴頻度を4件法で聞いているので、番組視聴の頻度と知識との相関を算出した。その結果を表2に示す。

表2からわかるように、「世界ウルルン滞在記」の視聴が多いほど、アジア、ヨーロッパ、アフリカのどの地域でも国名の想起数が多くなる傾向が見られた。また、「世界ふしぎ発見」の視聴が多いほど、アフリカの国名が多く想起されるという関係が示された。さらに、各地域出身の有名人の想起は、「ザ・世界仰天ニュース」「世界ふしぎ発見」「さんまのスーパーからくりTV」「素敵な宇宙船地球号」などの番組と相関があり、番組を見る頻度が高い者ほど外国出身の有名人を多く挙げていた。これらの番組の中では、有名な外国人が登場することが多いため、番組視聴が増加するほど外国人タレントの名前の認知度がよくなるためであろう。全体的にテレビ視聴が多いほど外国人の名前の認知が高まるという関係を示すものであり、上記の中学生で得られた結果と同様の傾向を示している。

ここで、特に「ここがヘンだよ日本人」の視聴経験との関連について述べる。「ここがヘンだよ日本人」は、日本のテレビの中で飛び抜けてアフリカ人の顕現性が高いことが特徴であった（萩原，2003）。しかし、表2では、当番組を視聴しているものほどアメリカの有名人との想起数が高くなっている。アフリカ出身者の想起数と相関がみられなかったのは、アフリカ人としての想起は高校生の場合ゾマホンとオスマン・サンコンの2人に集中していることから、視聴頻度に関係なく、番組を多少とも見ていた人であればゾマホンの名前は記憶に残っていたという点が考えられる。

その他のメディア接触（高校生対象）

新聞、インターネット、映画の利用と知識の関係を検討したところ、どのメディア利用も国名の想起数とは関連がみられなかったが、新聞だけは、ヨーロッパ出身の有名人の想起数と有意な相関がみられ、新聞を見る頻度が高いほどヨーロッパ出身の有名人を知っていた。このように、外国人の名前はテレビ、新聞といったメディアから得ている可能性が示された。

渡航経験

外国に行ったことがある子どもの割合をみると、小学生で61.4%、中学生61.0%、高校生47.5%であった。渡航先としては、ハワイ、グアムなどの太平洋州が過半数を占めていた。渡航経験の有無で国名と有名人の想起数に差異がみられるかどうかを学年と渡航経験の有無について2要因の分散分析を用いて検討した結果、渡航経験による差異⁽⁷⁾が、国

名の想起数ではみられなかったが、有名人の想起数で認められた。渡航経験のある群のほうが、経験がない群よりアメリカ出身 ($F = 10.9 (235), p < .001$) とアジア出身 ($F = 5.56 (235), p < .05$) の有名人の想起数が有意に多かった。ヨーロッパとアフリカ出身の有名人に関してはこの差異はみられなかった。

3. 外国イメージの変化

(1) 質問紙調査から

全体データ 外国イメージの測定には、12の形容詞から成るチェックリストを用いた。まず、全学年をあわせたデータ に対し形容詞別にクラスター分析を行い、20カ国を形容詞に対する反応をもとにまとめてみた。「自由な」は、アメリカとそれ以外の国に分かれ、アメリカ=自由の国というイメージが強いことがわかった。「自然が多い」のはオーストラリアとケニアである。最もそのイメージに遠いのはイラク、北朝鮮、韓国であった。「スポーツがさかん」であるのもアメリカが最も多く、アフガニスタン、イラク、北朝鮮はそのイメージから遠い。「ゆたかな」に対しては、およそ2つのクラスターに分けることが出来た。アメリカ、日本、イギリス、オーストラリア、イタリア、フランス、ドイツとそれ以外の国々である。最もゆたかなイメージが少ないのは、アフガニスタン、イラク、北朝鮮であった。「小さい」に対しては日本とそれ以外のクラスターにわけることができた。「小さい」という形容詞の選択が最も少なかったのは、アメリカ、オーストラリア、フランスであった。「安全な」イメージが強かったのは日本、弱かったのはアフガニスタン、北朝鮮、イラクであった。これと逆に「危険な」イメージはアフガニスタン、北朝鮮、イラクが強かったが、反対に危険なイメージが最も弱かったのは、イギリス、フランス、オーストラリア、イタリアであった。「科学技術がすすんでいる」イメージは日本と米国で強く、アフガニスタンとイラクで弱かった。「明るい」イメージは、全体で2つのグループに分かれていた。日本、アメリカ、オーストラリア、イタリア、フランス、イギリスとそれ以外の国々である。「暗い」イメージが強かったのはアフガニスタン、イラク、北朝鮮であった。また、「まずしい」も「暗い」とほぼ同じイメージでとらえられていた。「古い」イメージはエジプトで最も強く、アメリカ、オーストラリアでそのイメージが弱かった。

学年別選択率 12の形容詞について因子分析を行ない、これらの形容詞がどのような構造になっているかをみてみたところ、2因子を抽出した。第1因子は「自由な」「スポーツがさかん」「安全な」「科学技術がすすんでいる」「明るい」「ゆたかな」から、第2因子は「暗い」「まずしい」「小さい」「古い」「危険な」の項目から成り、それぞれ肯定的イメージと否定的イメージとみなすことができる。「自然の多い」という形容詞はどの因子にも高い負荷量があり、国によって肯定的にも否定的にも受け取られていることがわかった。因子ごとに項目を再配列して20の国に対して各項目が選択された割合を一覧表に整理したものが表3である。

まず、各学年で70%を超えて選択されている国を形容詞別に挙げる。

「自由な」を70%以上の者から選択されたのはアメリカ(中学81.8%, 高校81.9%)であった。「自然が多い」は、オーストラリア(中学72.7, 高校75.0)で、「スポーツがさかん」はブラジル(高校70.0%)で選択されていた。「暗い」イメージは、アフガニスタン(中学70.1%), 北朝鮮(小学75.9%)に対して強かった。「まずしい」もアフガニスタ

編注

7. 学年による差異は、すべての地域の国名と有名人の想起数において認められた。

表3 各国イメージの学年による差(それぞれの国について選択された形容詞の割合を学年別に並べた)

国名	自由な				自然が多い				スポーツがさかん				安全な			
	小学生	中学生	高校生	p	小学生	中学生	高校生	p	小学生	中学生	高校生	p	小学生	中学生	高校生	p
1 アメリカ	59.0	81.8	71.2	**	24.1	23.4	7.5	**	49.4	59.7	50.0		12.0	5.2	2.5	
2 アフガニスタン	3.6	3.9	1.3		7.2	14.3	21.3	*	1.2	1.2	3.8		1.2	1.3	0.0	
3 アルゼンチン	34.9	24.7	28.8		26.5	20.8	23.8		25.3	42.9	47.5	**	20.5	11.7	10.0	
4 イギリス	44.6	50.6	36.3		30.1	32.5	35.0		28.9	39.0	28.8		34.9	41.6	30.0	
5 イタリア	43.4	51.9	38.8		22.9	28.6	23.8		31.3	31.2	20.0	*	28.9	31.2	18.8	
6 イラク	3.6	2.6	5.0		8.4	3.9	7.5		0.0	0.0	1.3		1.2	3.9	1.3	
7 インド	21.7	19.5	8.8		26.5	33.8	25.0		7.2	5.2	2.5		15.7	9.1	3.8	
8 エジプト	31.3	14.3	12.5	**	26.5	18.2	32.5		7.2	2.6	2.5		13.3	6.5	2.5	
9 オーストラリア	55.4	58.4	48.8		50.6	72.7	75.0	**	21.7	27.3	18.8		28.9	35.1	30.0	
10 カメルーン	25.3	22.1	11.3		16.9	23.4	22.5		44.6	36.4	40.0		14.5	11.7	1.3	
11 韓国	39.8	23.4	17.5	**	12.0	9.1	6.3		34.9	22.1	22.5		20.5	11.7	11.3	
12 北朝鮮	1.2	3.9	2.5		3.6	5.2	5.0		2.4	3.9	2.5		0.0	0.0	1.3	
13 ケニア	25.3	23.4	16.3		30.1	33.8	32.5		13.3	15.6	11.3		6.0	6.5	1.3	
14 中国	39.8	28.6	16.3	**	22.9	9.1	11.3	*	24.1	11.7	18.8		14.5	10.4	7.5	
15 ドイツ	39.8	33.8	37.5		31.3	29.9	27.5		32.5	26.0	15.0		26.5	19.5	16.3	
16 トルコ	31.3	23.4	25.0		25.3	13.0	7.5	**	26.5	19.5	22.5		13.3	20.8	7.5	
17 日本	62.7	48.1	40.0	*	39.8	29.9	18.8	*	47.0	41.6	27.5	*	55.4	40.3	41.3	
18 ブラジル	28.9	40.3	46.3		32.5	27.3	36.3		50.6	57.1	70.0	*	21.7	14.3	6.3	*
19 フランス	42.2	54.5	46.3		34.9	23.4	25.0		28.9	37.7	27.8		26.5	26.0	27.5	
20 ロシア	31.3	39.0	30.0		34.9	31.2	23.8		18.1	18.2	16.3		22.9	19.5	5.0	
	科学技術がすすんでいる				明るい				ゆたかな				暗い			
国名	小学生	中学生	高校生	p	小学生	中学生	高校生	p	小学生	中学生	高校生	p	小学生	中学生	高校生	p
1 アメリカ	54.2	62.3	57.5		56.6	67.5	60.0		50.6	55.8	50.0		6.0	2.6	0.0	
2 アフガニスタン	3.6	5.2	0.0		2.4	1.3	1.3		2.4	3.9	0.0		66.3	70.1	48.8	*
3 アルゼンチン	8.4	5.2	6.3		28.9	18.2	18.8		20.5	22.1	15.0		6.0	15.6	6.3	
4 イギリス	24.1	28.6	13.8		45.8	55.8	48.8		60.2	66.2	40.0	**	1.2	1.3	2.5	
5 イタリア	18.1	19.5	7.5		54.2	59.7	55.0		48.2	58.4	33.8	**	3.6	1.3	2.5	
6 イラク	6.0	3.9	1.3		4.8	2.6	0.0		2.0	2.6	2.5		60.2	61.0	57.5	
7 インド	3.6	3.9	3.8		24.1	20.8	6.3		22.9	5.2	1.3		18.1	20.8	25.0	
8 エジプト	4.8	3.9	2.5		19.3	13.0	8.8		16.9	11.7	6.3		15.7	16.9	16.3	
9 オーストラリア	19.3	18.2	8.8		45.8	51.9	57.5		43.4	42.9	33.8		0.0	2.6	2.5	
10 カメルーン	10.8	9.1	1.3		18.1	27.3	21.3		20.5	14.3	2.5		6.0	9.1	6.3	
11 韓国	19.3	14.3	11.3		33.7	32.5	30.0		33.7	24.7	20.0		18.1	15.6	21.3	
12 北朝鮮	15.7	7.8	12.5		6.0	6.5	0.0		3.6	5.2	2.5		75.9	66.2	60.0	
13 ケニア	4.8	2.6	0.0		18.1	11.7	6.3		16.9	10.4	3.8		14.5	19.5	12.5	
14 中国	19.3	20.8	7.5	*	28.9	28.6	17.5		28.9	22.1	15.0		14.5	18.2	17.5	
15 ドイツ	19.3	15.6	15.0		28.9	32.5	28.8		34.9	39.0	31.3		6.0	11.7	8.0	
16 トルコ	12.0	6.5	3.8		21.7	26.0	28.8		21.7	24.7	13.8		9.6	14.3	6.3	
17 日本	56.6	58.4	46.3		66.3	59.7	36.3	***	65.1	58.4	46.3	*	3.6	11.7	7.5	
18 ブラジル	14.5	10.4	3.8		30.1	40.3	38.8		26.5	24.7	7.5	*	14.5	3.9	3.8	
19 フランス	26.5	24.7	16.3		38.6	46.8	46.3		29.8	48.1	46.3		3.6	6.5	1.3	
20 ロシア	24.1	16.9	5.0		27.7	37.7	15.0	**	22.9	41.6	23.8	*	16.9	28.6	23.8	
	まずしい				小さい				古い				危険な			
国名	小学生	中学生	高校生	p	小学生	中学生	高校生	p	小学生	中学生	高校生	p	小学生	中学生	高校生	p
1 アメリカ	10.8	3.9	1.3		1.2	0.0	0.0		2.6	2.6	2.5		30.1	46.8	63.8	***
2 アフガニスタン	67.5	75.3	77.5		25.3	32.5	13.8	*	25.3	22.1	23.8		72.3	80.5	72.5	
3 アルゼンチン	9.6	9.1	5.0		10.8	11.7	6.3		12.0	11.7	5.0		6.0	7.8	6.3	
4 イギリス	2.4	3.9	1.3		3.6	6.5	8.8		7.2	14.3	25.0	**	2.4	3.9	0.0	
5 イタリア	2.0	0.0	2.5		4.8	7.8	3.8		4.8	5.2	11.3		4.8	1.3	7.5	
6 イラク	53.0	58.4	56.3		22.9	37.7	15.0	*	26.5	28.6	18.8		75.9	70.1	71.3	
7 インド	24.1	29.9	42.5	*	7.2	18.2	15.0		27.7	32.5	37.5		10.8	10.4	20.0	
8 エジプト	33.7	23.4	28.8		13.3	14.3	6.3		42.2	49.4	52.5		13.3	13.0	13.8	
9 オーストラリア	2.4	2.4	0.0		2.4	3.9	1.3		6.0	3.9	3.8		4.8	2.6	3.8	
10 カメルーン	4.8	13.0	16.3		9.6	18.2	16.3		4.8	7.8	10.0		4.8	6.5	8.8	
11 韓国	15.7	15.6	12.5		8.4	23.4	22.5	*	13.3	20.8	11.3		18.1	13.0	16.3	
12 北朝鮮	68.7	63.6	58.8		30.1	28.6	22.5		25.3	31.2	26.3		85.5	71.4	75.0	
13 ケニア	21.7	33.8	33.8		12.1	14.3	23.8		12.0	14.3	13.8		10.8	6.5	16.3	
14 中国	15.7	13.0	25.0		6.0	3.9	7.5		24.1	28.6	28.8		19.3	16.9	17.5	
15 ドイツ	4.8	7.8	3.8		7.2	6.5	7.5		6.0	3.9	17.5		7.2	5.2	5.0	
16 トルコ	13.3	10.4	10.0		12.0	11.7	17.5		9.6	9.1	8.8		9.6	5.2	3.8	
17 日本	8.4	11.7	5.0		39.8	44.2	38.8		18.1	9.1	7.5		10.8	23.4	16.3	
18 ブラジル	12.0	13.0	11.3		12.0	6.5	1.3		7.2	5.2	7.5		9.6	5.2	15.0	
19 フランス	3.6	2.6	3.8		4.8	2.6	2.5		6.0	2.6	12.5		4.8	5.2	1.3	
20 ロシア	13.3	10.4	11.3		12.0	3.9	1.3		12.0	10.4	13.8		18.1	23.4	21.3	

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

ン（中学75.3，高校77.5）に対して、「危険な」のイメージはアフガニスタン，イラク，北朝鮮で強かった。アフガニスタン，イラク，北朝鮮は否定的なイメージが強いといえる。

次に，学年間で選択率に差があるかどうかをみるために，各項目別にカイニ乗検定⁸を行ない，有意な差異がみられた項目について，表3のp値に印をつけて示した。「自由な」イメージは，アメリカで小学生から中学生にかけて増加しているが，エジプト，韓国，中国，日本に対しては，学年が上がるにつれ選択数が下がっている。特に小学生から中学生にかけて選択率が下がっており，エジプト，韓国，中国は「自由」な国としてのイメージは中学生ではほとんどもたれていないことが示された。「自然が多い」イメージは，オーストラリアとアフガニスタンで増加しているが，アメリカ，中国，トルコ，日本では下がっている。「スポーツがさかん」では，アルゼンチンとブラジルで選択率は上がっているが，イタリアと日本では下がっていた。「ゆたかな」の選択率は，イギリス，イタリア，日本，ブラジルで下がり，ロシアでは中学生で少し上昇している。イギリス，イタリア，日本は半数を超える選択率があるが学年があがるにつれ下がっており，「ゆたかな」の基準が先進国という意味だけではなくてくるようである。「安全な」は，トルコ，ブラジルで下がり，「科学技術がすすんでいる」は中国で，「明るい」は日本とロシアで下がっている。これらの項目に関しては，主に中学から高校にかけて下がっている。外国の知識が増加し，成人のもつ国のイメージに近くなってきたことが示唆される。

否定的な形容詞のうち，「暗い」の選択率は学年が上がるにつれアフガニスタンで下がり，「まずしい」はインドで上がっている。「小さい」の選択率はアフガニスタン，イラクで下がり，韓国で上がっている。「危険な」はアメリカで上がっている。

以上のように形容詞の選択率の学年による変化から，小学生から高校生にかけて肯定的なイメージが弱まる国が多いことがわかる。

（2）カード分類からの分析

本研究では，子どもとの面接におけるカード分類法でも国のイメージを探った。20の国を分類させ，同じグループとみなされた国を相互に近い距離であるとみなし，20×20の国同士の距離マトリックスを学年別に作成し，MDSで分析した。図3-1～図3-3はその結果を示すもので，調査対象者が20カ国に対して持つ各国相互の距離イメージを2次元空間上に表したものとみなすことができる。

まず，小学生だが，イラクとアフガニスタン，中国と韓国，イギリスとロシア，ドイツとフランス，アメリカとイタリア，オーストラリアは距離が近いことから，それぞれ似たイメージをもっていると考えられる。横軸の中央に日本が位置されており，最も距離が近いのがアメリカである。イラク，アフガニスタン，北朝鮮，イギリス，ロシア，フランスは日本と距離があり，心理的に遠い国としてとらえられているようである。カメルーン，エジプト，ケニア，ブラジル，アルゼンチン，トルコは空間の中央付近にまとまっている。これらの国に関しては個人面接において小学生では「きいたことはある」程度であまり具体的なイメージをもっていない子どもが多かった。そのために同じ群としてまとまったものと考えられる。

中学生では，ヨーロッパとアジアの国がまとまっている。トルコ，アルゼンチン，カメルーンはサッカーの盛んな国というところでお互いに近いところに位置していると思われる。エジプトとブラジル，アフガニスタンとイラクは互いに距離が近い。ケニアと

8．形容詞選択数が，小学生，中学生，高校生の各セルで最低で5を超えるものに対して検定した。

図3-1 小学生における20カ国の認知地図

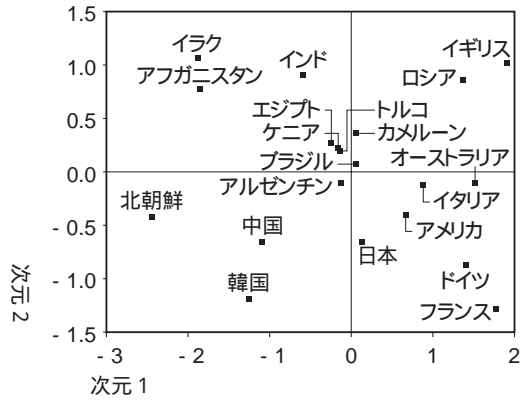


図3-2 中学生における20カ国の認知地図

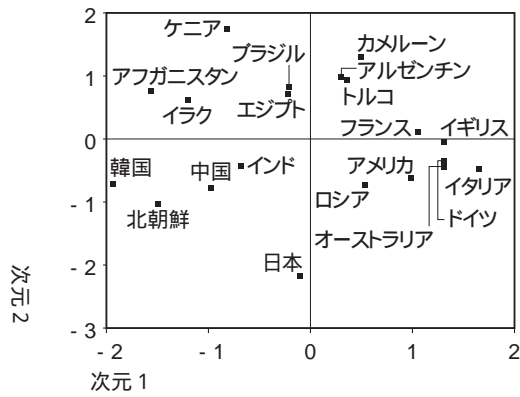
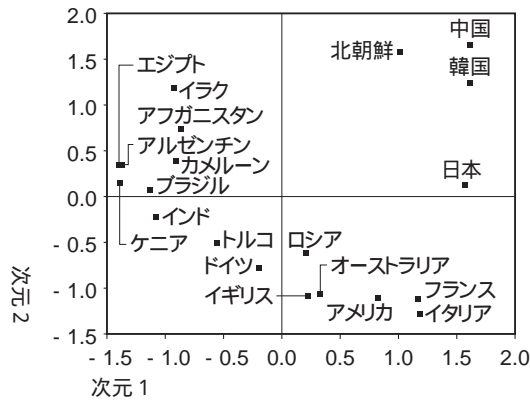


図3-3 高校生における20カ国の認知地図



日本は最も遠い距離にある。日本からみてアジアとアメリカおよびヨーロッパは近い国であるが、アフリカ、中南米は遠い国であることがわかる。

小学生と中学生では日本の位置が多少異なる。小学生では日本はアメリカやヨーロッパの国と比較的近いところにあるが、中学生では、中国、韓国、北朝鮮の東アジアの3国と、アメリカ、オーストラリア及びヨーロッパの国々のグループの中間に位置する。

また、ヨーロッパの国が中学生でまとまっている。これは、日本の世界における地理的位置やヨーロッパについての知識の増加が反映されていると考えられる。この点は、国を分類するときの理由からも伺われる。中学生になると「近いところにあるから」というような地理的な理由が増加し、全体の選択理由に対して占める割合が小学生の2倍になる。

高校生では、中国、韓国、北朝鮮と、アメリカ、オーストラリア及びヨーロッパ諸国、それ以外という3つのグループができています。日本からみて近隣3国とヨーロッパおよびアメリカ以外は遠い距離にあり、このグループにはイラク、アフガニスタンに加え、中南米、アフリカの国が入っている。これらの国々は地理的にも分化されていないことがわかる。以上のように小学生から高校生までをみみると、あまり国のイメージが明確でない小学生から、中学生で国のイメージがまとまり始め、高校生になって中国、韓国、北朝鮮という日本から地理的に近い3国と、ヨーロッパおよびアメリカという日本人にとって心理的に近い国とそれ以外というグループにまとまる過程をみることができると。中南米やアフリカの国は小学生では具体的なイメージはなく、中学生以降、遠い距離の国になり高校生でもそのままであることが示されている。

(3) 形容詞選択数からの分析

本研究では、20の国それぞれについて当てはまるイメージを12の形容詞の中から選択させている。この場合、対象国に対して明確なイメージがない場合は形容詞の選択が少なくなることが予想される。一方、対象国に対して関心が高い場合は、形容詞選択が多くなる可能性と同時に、国に対して明確なイメージを持っている場合には形容詞選択は逆に少なくなる場合も考えられる。各国別に選択した形容詞の数を検討した結果、形容詞選択が最も多かった国は日本で、平均が4.13、次にアメリカで3.77、イギリス2.99と続いていた。逆に低いのは、カメルーン1.79、トルコ1.82、ケニア1.89であった。カメルーンに対しては「スポーツがさかん」、ケニアに対しては「自然が多い」「まずしい」という形容詞が他の形容詞と比べ多く選択されていた(表3参照)。トルコについては明確なイメージがもたれていないことがわかる。

20の国に対して選択された形容詞の数の合計は、小学校、中学校、高校でそれぞれ52.9、53.4、45.8であり、学年による差はみられなかったが、日本($F(237)=7.78$, $p<.001$)とロシア($F(237)=4.02$, $p<.05$)に関しては、学年による減少が認められた。日本は小学生4.73、中学生4.36、高校生3.31、ロシアは、小学生2.54、中学生2.80、高校生1.90であり、高校生の形容詞選択が少なくなっているのがわかる。日本の場合、上述したように肯定的な形容詞への反応が減り、日本に対する評価は学年があがるにつれ厳しくなっていることが示された。ロシアの場合は、国自体に対して関心が低下した結果だと考えられる。

▶ 考 察

1. 外国の知識の発達的变化

本研究では、地域別の国名、有名人の自由想起を用いて外国の知識の学年による変化を検討した。まず、国名の自由想起についてみると、どの地域も学年が上がるにつれ正しく想起される国の数は増加しており、国の名前に関する知識は確実に増加することが示された。学校教育の中で外国の知識に触れる機会からみると、小学校では6年生の後半期に社会科で多少外国のことが紹介されるが、本格的に知識として入ってくるのは中学生からである。このため、本研究での小学生と中学生の外国に関する知識の量は明ら

かに異なることが考えられる。

しかし、地域により想起される数に大きな差異があり、アフリカの国は、アジア、ヨーロッパに比べてどの学年でも認知度が極端に低いことが示された。

次に、地域別の有名人の想起数をみてみると、国名と同じように学年が上がるにつれ増加した。「有名人」として挙げられたのは、中学、高校生の場合はほとんど歌手やタレントであり、青年期初期の年代での歌手やタレントへの興味の増大が背景にあることが予想される。しかし、有名人の想起数でもやはりアフリカ人は他の地域と比べて少なかった。

本研究の対象者においてなぜこのように知識に地域差が明瞭に見られるのだろうか。理由としてまず、わが国での外国の情報が依然としてアメリカとヨーロッパに偏っているためだろうということが考えられる。そこで、教育場面での外国の扱いをみてみた。本研究の対象者である中学生が使っていた教科書では、中国、ドイツ、アメリカ合衆国の3国が、詳しく説明されており、それ以外の地理の教科書では、中国、イギリス、アメリカの3カ国や、アメリカ、マレーシア、フランスの3カ国が主にとりあげられていた。これらの国は、日本と政治、貿易、文化などいろいろな面で関連が深いということでもとりあげられているのだが、その基準によると当然ながら、アフリカ諸国などについての記述は非常に少ないものにならざるを得ない。

では、子どもが日常接しているテレビ番組の影響はどうだろうか。国名と有名人の想起数は、視聴するテレビ番組と有意な相関がみられたことから、テレビ視聴の影響も示唆される。小学生では、ニュース番組の視聴と国名の想起に有意な相関がみられ、中学生ではその関係がみられなかった。アジアとヨーロッパの国名の想起数をみてみると、小学生では1個も正答数がない子どもが5割程度おり、これは中学生の2倍である。この学年差は学校で体系的に習っていないということの現れであろうが、この場合、ニュースをよく視聴する子どもとそうでない子どもの差が外国名の知識の差に反映された可能性が高いといえるだろう。

有名人の想起数と関連するテレビ番組は、国名の想起数と関連するテレビ番組より多いことから、国名より人名のほうが、テレビ視聴の影響を受けていることが考えられる。さらに、アメリカとアジア出身の有名人の想起数は、渡航経験と関連しており、渡航経験が多い子どもほどアメリカとアジア出身の有名人の数を多く知っていた。調査対象者の渡航先は、グアム、ハワイなどのアメリカの太平洋州に集中しているが、そのような渡航経験が外国人への興味を高める可能性もあるだろう。このように、外国の国名の知識としては、学校教育と新聞、テレビのニュースの接触頻度の影響が、また外国人の名前については、テレビ番組の視聴や渡航経験などの多様な要因が関連していると考えられる。

興味深いのは、テレビ番組の視聴と外国の知識との関連において、国の名前ではなく、人物名が記憶にのこりやすいということである。たとえば、高校生ではアフリカ人として「ゾマホン」という個性的な人物の想起が多かった。「ここがヘンだよ日本人」は、2002年3月に終了しているのに、本研究の高校生は中学生の時に視聴していたことになるが、その番組で最も顕現性の高かった人物の名前が今でも多く挙げられていることになる。ゾマホンは番組終了後時々テレビに出ていたこともあるが、その人物の個性の強さだけでなく、日本のメディアにおいて、あるいは教科においてゾマホンの他にアフリカ出身の有名人として想起される人物の少なさを反映しているともいえる。さらにまた、ゾマホンの出身国であるベナンという国の名前は全く想起されていない点も興味深い。番組の中ではゾマホン自身が「アフリカ人」であることを強調していたためであるかも

しれないが、ゾマホンがクローズアップされるたびに胸の「ベナン出身」という文字が映し出されていたにもかかわらず国名は記憶から抜け落ちてきているようだ。アフリカ出身の有名人だけでなく、他の地域の有名人の想起、中でも芸能人、タレントの場合は名前は書いていても出身を誤っている回答が多かったことから、有名人の名前は想起しやすが、その出身国となると認識度は薄いといえるだろう。

2. 外国のイメージの変化

外国のイメージについては、12の形容詞の選択率をもとに選択して各国のイメージを探った。また、質問紙調査だけでなく、カードを利用して、各国の心理的な遠近の距離を図式化することもあわせて行った。全体的にみて、アメリカとヨーロッパの国は日本も含めて「自由な」「明るい」といった肯定的なイメージが強く、一方、アフガニスタン、イラク、北朝鮮は「暗い」「危険な」という否定的なイメージが強いことがわかった。それ以外の国に関しては漠然としたイメージである。このように、アメリカ、ヨーロッパおよびオーストラリアに対してはかなり肯定的方向に偏ったイメージがあるのである。アメリカ、ヨーロッパ以外の地域は関心も少なく、イメージもあまり良いものではない。日本に距離的に近い中国や韓国はどちらかといえば、「自由」でなく、「暗い」イメージに近い。否定的なイメージを強くもたれているアフガニスタン、イラク、北朝鮮については教科書ではほとんど触れられていないことから、3国のイメージは、学校教育の影響よりは現在の社会情勢とそれを伝達するメディアの影響が強いものであると思われる。

国同士の距離もまさに、前述した知識、関心と一致しており、日本と近いところに東アジアの3国とヨーロッパ、アメリカがある。最も遠いところにアフリカと中南米の国が位置しているのである。

発達のな変化に注目してみると、国のイメージは、小学生の漠然としたイメージから中学生、高校生にかけてイメージが明確化しているといえる。たとえば、中国についていえば、「自由な」「自然が多い」「科学技術がすすんでいる」を選択するものは学年が上がるにつれて減り、高校生ではこれらの形容詞はほとんど選択されていない。ブラジルに関しては、「スポーツがさかん」は学年があがるにつれ有意に増加しているが、「ゆたかな」「小さい」「安全な」「科学技術がすすんでいる」というイメージは高校ではほとんどもたれていない。ロシアのイメージも学年により大きく変わり、「科学技術がすすんでいる」「明るい」というイメージはほとんどみられなくなる。このような傾向は、これらの国に関して地理的な知識が増加したためだと考えられる。

以上、小学生から高校生までの間に国のイメージが分化して明確になるという発達のな変化が示されたが、アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアに関する肯定的イメージがどの学年も強いことは印象的である。情報が多から肯定的になるのか、もともと肯定的なイメージをもっているために情報を取り入れようとするのかという問題がある。これはおそらく両方がはたらいていると思われるが、外国について学校教育で体系的に学ぶ前の小学生の段階ですでに西欧のイメージが良いことから、後者の作用が強いとみなすことができるだろう。教育上、日本と交流の深い国々が詳しく取り上げられるとすれば、アメリカやヨーロッパ以上にアジアの国が取り上げられるはずであり、実際、中国や韓国は教科書の中では取り上げられていることが多い。しかし、子どもの関心は薄いのである。メディアからの情報がアメリカやヨーロッパ、オーストラリアに関しては肯定的な情報に偏っている可能性も考えられる。これは、おそらく日本人だけにみられる特徴だけでなく、世界中でみられる現象なのではないだろうか。

▶ 今後の課題

本研究では、小学、中学、高校生と外国の知識およびイメージがどう変化するかという観点から調査と面接の方法をとり検討した。その結果、地域別の国の名前、および有名人の名前の認識度は学年があがるにつれ増加するが、アフリカに関する知識はアジアやヨーロッパに比べ非常に低いことがわかった。また、イメージに関しても学年が上がるにつれ、各国のイメージの分化が明らかになったが、同時にアメリカ、ヨーロッパの国の肯定的イメージと、アフガニスタン、イラク、北朝鮮の3国の否定的イメージの強さが浮き彫りにされた。中学生、高校生にとっても、アフリカおよび南米の国は地理的に分離するわけでもなく、インドや中近東の国も含めて日本から遠い存在であるかのようなイメージを持たれていることが明らかになった。

これに関してマスメディアの情報伝達の仕方、教育のありかたが考察されたが、子どもの外国イメージ形成の偏りをみるにつけ、マスメディアのイメージ伝達の影響の大きさについて今後より詳細に検討する必要があるだろう。

本研究は、調査対象者として、同一大学に附属する小学校、中学校、高校の生徒を対象にしたが、対象者に関していくつかの特徴がみられる。たとえば、小学校では、有名人として歴史上の人物や政治家が男女を問わずあげられていたが、この点、本研究の小学生の外国に関する興味や知識は小学生としては豊富な方かもしれない。また、本研究の調査対象者は全体的に、日本の平均的な子どもよりは渡航の経験が多く、外国人との接触も多いようだった。このようなサンプル上の制限から本研究の結果を日本の小学生、中学生、高校生に一般化することは難しいかもしれないが、本研究は、外国に関する知識やイメージの発達的变化を明確に示すことが出来た点で有意義なものであるといえよう。

謝 辞

調査の実施にあたり、協力していただいた小学校・中学校・高校の先生方ならびに生徒の皆様には心より感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 深谷昌志（1992）子どもたちと外国人 「小さな国際人」は育っているか 児童心理 7, 80-85.
 萩原滋（2003）『ここがヘンだよ日本人』：分析枠組みと番組の特質 メディア・コミュニケーション, 53, 5-27.
 松田奈利子（1998）異文化の視点からみたメディア・ステレオタイプとメディア・リテラシー 愛知産業大学短期大学紀要 11, 267-289.
 大坪寛子・相良順子・萩原滋（2003）調査結果に見る『ここがヘンだよ日本人』の視聴者像と番組視聴効果 メディア・コミュニケーション, 53, 77-96.
 ライフデザイン研究所（1999）地域住民の国際化と国際交流に関する調査研究
 竹田美和（2000）若者の外国人に対する意識とその影響要因 関西地域の大学生に対する調査から 奈良女子大学家族研究論叢 6, 39-54.
 我妻洋・米山俊直（1967）偏見の構造 日本放送出版協会

（相良順子 聖徳大学人文学部専任講師）

（萩原 滋 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所教授）